

太平洋戦争初期における連合国側の戦略 パール・ハーバーとアメリカの反応

ウィリアムソン・マーレー

はじめに

アメリカ海軍にとって戦艦隊の潰滅が太平洋の勝利に向かうモーニングコールになったというのは、真珠湾の惨事を表す決まり文句である。この言葉にも一面の真実が含まれているが、一方で、アメリカ軍特に海軍が完全な戦闘準備を完了し、日本海軍と比較的同様の条件で対峙するまでにたどらなければならなかった厳しい道筋についてはかなりの誤解もある。実際、真珠湾攻撃は、アメリカの戦略と紛争の本質を形作った一連の危機の第1ラウンドにすぎなかったのである。

本稿では、開戦後10か月間のアメリカ軍およびアメリカ海軍の戦略について調べ、実際に何が起きたのか、そして各軍、特に海軍が1943年夏までの間に、官僚的文化を持つ平時の軍から恐るべき戦闘機械へと変貌を遂げた道筋を検討する。本稿において焦点を当てる決定的な要点は、太平洋戦争の当初の期間、すなわち1943年と1944年におけるアメリカの最終的勝利の基礎を築いた11か月間の日本との戦闘の前線における戦略と作戦行動の相互作用である。

真珠湾攻撃の影響

真珠湾攻撃の13か月前、アメリカ軍部の指導者たちは国家戦略の全体的方向性を形作っていた。ハロルド・"ベティ"・スターク海軍大將は、その重要パラグラフから「ドッグ計画」として歴史家に知られている計画書を承認した。このパラグラフでは、万一合衆国が枢軸国との戦争に巻き込まれた場合、生産力と軍事力の大部分をナチスドイツ打倒のために集中し、その間太平洋では防勢をとると主張していた。スタークのこの主張は、脆弱な経済基盤を考えると日本が太平洋で勝利を収めることはできず、一方ドイツはわずか6週間の作戦でフランスを蹂躪したことを考えれば、ドイツがヨーロッパの戦いで勝利を収める可能性があるという現実的評価によるものだった。また、スタークの主張の裏付けとなった日本軍の軍事的能力に対する評価もかなり低いもので、それによってアメリカ軍の司令官たちは戦争のかなり遅い時期まで苦しめられることになった。また、このような低い見積もりはア

アメリカ国民の認識をも誤らせていた¹。

スタークはすぐに、陸軍参謀総長ジョージ・C・マーシャル将軍の1940年11月12日付署名がある、「ドッグ計画」覚書に明確に述べられた戦略的アプローチに対する同意書を受け取った。アメリカ大統領フランクリン・デラノ・ルーズベルトは、自分が政治的に微妙な立場に居ることを承知していたため、陸海両軍の最高司令官から戦略的評価を受け取っても公式には同意しなかった²。しかし、大統領が不同意の意志を示さなかったということは、司令官たちの意見具申に暗黙の了解を与えたことを示していた。ただし、大統領と上級軍事顧問がすぐに見いだしたとおり、戦略方針というものはどちらかという戦前の計画よりも紛争が展開していく政治的文脈や敵の意思決定に大きく左右されるのであった。

これまで無数の歴史家が指摘しているように、真珠湾攻撃は、分裂していたアメリカ国民を結びつける紐帯となった。この要因は、第二次世界大戦におけるアメリカの勝利に非常に大きな貢献をしたのだが、アメリカの戦略にも深い影響を与えた。アメリカ国民の怒りからすると、軍部が太平洋戦域を無視するだけの余裕を持った戦略的アプローチを取ることは実際上不可能であった。さらに、開戦後6か月間に日本軍が数々のめざましい勝利を挙げたため、アメリカとしても、単に政治的な理由だけではなく、日本の征服地域が外側へと拡張する傾向が続けば、ますますアメリカの反攻が困難になるという理由から対処の必要が生じた。

真珠湾攻撃がもたらしたもののひとつとして、アメリカの即時反撃の可能性を取り除いたということがある。真珠湾で旧式戦艦を沈められたことで、アメリカ艦隊に中部太平洋を横切って前進させ、敵の重圧のもとにある在比アメリカ軍を救援させるという選択肢はもはや存在しなくなった。もしも真珠湾攻撃がなかったら、海軍の体質、アメリカ国民からの政治的圧力、および在比アメリカ軍の絶望的状况が相まって、そのような攻撃が行われたかもしれないが、その場合最もあり得る結果は壊滅的な軍事的敗北であろう³。

しかし、真珠湾での損害により、アメリカの戦略には艦隊に残されたものをどのように有利に利用するかという困惑すべき問題が加わった。ここで、真珠湾攻撃の

¹ このことが、タラワの激戦で戦死した海兵隊員たちの身の毛もよだつような写真を海兵隊が公表することにつながった。

² ルーズベルトは、再選のための選挙運動中、アメリカの軍人を海外での戦闘に派遣することはないと公約していた。連邦議会は1941年7月、アメリカが戦略的に絶望的という段階を超えて悪い状況に置かれているときに、徴兵制を更新する決議をわずか1票差で可決したという事実は、アメリカ国民が日本の真珠湾攻撃の直前においても完全に分裂していたということを物語っている。

³ 災難のもとになったのは、実は艦船の喪失ではなく、乗組員の喪失の方であったらう。真珠湾攻撃によって発生したアメリカの死傷者数は甚大だったが、生き残った乗組員、下士官、および士官が、アメリカの造船所で大量に生み出される艦艇に配置される新兵のふくれあがる流れを燃え立たせ訓練を施した。

直接の余波として起きた軍指導部の交代が重要な役割を演じた。ルーズベルト大統領は、アメリカの参戦にあたり、最高レベルの軍指導者を多数交代させた。第一に、真珠湾の米軍指導部、H・E・キンメル海軍大将とW・C・スコット陸軍少将を解任した。また同時にスタークを解任し、ロンドンの任地に事実上追放した。後任は米軍史上もっとも獐猛かつ有能な軍事指導者のひとりであるアーネスト・J・キング海軍大将であった。キングは、前任者に加えて戦前の海軍に対して次のような厳しいが正当な論評を加えた。

「海軍は、真珠湾における事態に関して責任の一端を負うことを逃れることはできない。この災難を、人間業では防止も軽減もできない『神のみ業』と見なすことはできない。」

スターク提督とキンメル提督の責に帰すべき問題点は、命令の失敗ではなく職務怠慢による失敗であった。問題となっている事例において、両提督にとがめられるべき失敗があったというわけではないが、階級と職務にふさわしい指揮命令に必要となる優れた判断力が不足していたことは明らかである。ある種の判断力の不足が将来の失敗につながることはないように適切な行政上の措置を取ることが両提督を律する規則となっていたように見受けられる⁴。

キングの論評は、後で触れるように、海軍が絶望的に必要としていた断固とした大掃除を行うことになるこの人物の、辛辣で自己主張が強い性格を反映したものだ。以前防衛研究所で開催された会議において、同僚アラン・ミレットによるキングの性格に関する文章を引用したことがあるが、ここで再度同様の引用をさせていただきたい。というのは、その描写が戦時の重圧下で必要となる多くの性質はもちろん、この人物の性格についても最良のものであると信じるからである。

(キングの)影響力は、彼の性格ではなく専門的知識と意志の力によるものであった。キングの崇拜者であり最も親密な仲間でもあったチャールズ・M・“サビー”・クック海軍少将が残したこれ以上ないくらい寛大な言葉として「行動の人」という評があるが、一方でキングと親しかった別の人物は「言葉にできないほど卑劣だ」としている。海軍作戦部長としては、平時に2度にわたり候補から外されてきたキングだったが、ここにきて大西洋艦隊司令長官を退きワシントン

⁴ キング提督は、合衆国海軍予審軍法会議が作成した報告書を是認しつつ論評していた (Samuel Eliot Morison, *The History of United States Naval Operations in World War II* vol. 3, *The Rising Sun in the Pacific, 1931 - April 1942* (Boston, 1948), p.142)

に戻ってその職に就いた…。キングの任務は、日本を叩き潰すというただ1点に尽きていた…。

キングは、敵対する者を潰すことに一生を捧げてきた男で、まさに日本を破滅させるための男だった…。

提督になってからキングの行動は改善されたが、分別のほうはそうではなかった。公衆の面前で部下を罵倒し、艦橋を恐怖で支配し、無能な人間と魅力的すぎると思う士官には毒づいた。彼は周辺の全員の生活を悲惨なものにした…⁵。

しかし、ミレットは次のようにも指摘している。「キングは、海上戦のあらゆる側面についての完璧な専門技能と管理能力から、次々に困難な任務を割り当てられた」⁶。戦後、「ものごとが厳しい雲行きになると、げす野郎が呼びだされるものなのだ」という言葉がキングの発言として引用された。ただ、キング自身は発言したことを否定しつつ、言えばよかったと付け加えた。

疑いなく、ルーズベルトがキングの海軍作戦部長就任を一度ならず二度までも見送ったのは、その性格のためであった。キングの有能さは多数の領域にまたがっていたが、最も重要な特質は、(1)潜水艦と航空機から兵站に至る海軍の全ての問題についての完全な理解と基礎知識、(2)第一級の戦闘指揮官を見つけ出す能力、(3)海軍軍人という職業およびその神聖化された伝統の上品な部分には最小限の注意も払わない無慈悲さ、という3点であった。

ルーズベルトと補佐官たちの任命行為で2番目に重要だったのは、提督たちに手を伸ばして、キンメルの後任に太平洋艦隊司令長官(CINCPAC)としてチェスター・ニミッツ提督を指名したことであった。いろいろな意味で、ニミッツはキングのほとんど正反対の人物であった。まったくの好人物で、幕僚や接する全ての人物を非常に礼儀正しく思いやりを持って扱った。しかし、ニミッツもキングと同様桁外れに有能で、人間の強さと弱さをしっかりと見極めることができ⁷、日本に対するアメリカの戦争遂行を担うリーダーの選択ではほとんど間違いを犯さなかった。

キングは、1941年12月20日、合衆国艦隊司令長官(CINCUS Fleet〔訳注："sink us" fleet「我ら艦隊を沈めよ」と同音〕という恐ろしい略語で呼ばれる)に任命された。さらに、すぐにより権限の大きい海軍作戦部長の職務を受け継いだ。ニミッツ提督は12月17日に任命を受け、クリスマスの日に真珠湾に着任した。ふたりの提

⁵ Williamson Murray and Allan R. Millett, *A War to be Won: Fighting the Second World War* (Cambridge MA, 2000).

⁶ 同上。

⁷ ニミッツ提督の経歴、個性、および指導的資質についての尊敬すべき研究が数ある中でも、E.B. Potter, *Nimitz* (Annapolis, MD, 1976)は特に参照に値する。

督は膨大な難問に直面した。戦略的条件の面では、アメリカの圧倒的な工業生産力が「両軍の力関係」に対してものを言うようになる前に、日本が太平洋で決定的勝利を収めるのを防ぐ方法を見つけなければならなかった。

しかし、同じくらい重要だったのは、両提督が真珠湾の大惨事をこれほどまでにひどくした原因の一部である平時海軍の文化を変えなければならないという事実であった。そして、それは、太平洋の戦闘部隊を指揮する提督たち その一部は親しい友人であり、全員が数十年にわたる同僚であった を能力で選別しなければならない、ということの意味した。

ひどい打撃を受けたウェーク島の海兵隊守備隊と民間人を復活させる試みの大失敗ほど、文化を変えるという問題の難しさを明瞭に示すものはなかった。1941年12月11日、日本の小規模な任務部隊がウェーク島を攻撃し、断固たる反撃のため一敗地にまみれた。開戦後6か月間で日本がはっきりと敗北したのは、このときだけであった。はっきりしていたのは、日本軍がすぐに戻ってくるだろうということだった。もしウェーク島守備隊が前回の日本の攻撃ですでに全力を発揮しなければならなかったとしたら、増強されるべきだし、真珠湾の司令部は素早く断固とした行動を取る必要があった⁸。

実際には司令部はいかなる形でも行動しなかった。戦艦の生存者が太平洋艦隊司令部での臨時任務に就いていたある水兵の回顧録にも書かれているが、上級士官の間には混乱とカオス以外の何者も存在しなかった⁹。キンメル提督はウェーク島守備隊の増援として身が入らない若干の努力をしていた。キンメル提督は、太平洋に展開する航空母艦3隻全てを使用し、日本軍をマーシャル諸島に釘付けにするための、ヤルト島への陽動攻撃を含む複雑すぎる作戦を立てた。ハルゼー提督のエンタープライズ任務部隊はオアフ島を掩護することになっていた。救援隊は、サラトガ任務部隊の指揮官の方が航空作戦の経験が遙かに深いにもかかわらず、フランク・ジャック・フレッチャー海軍少将の指揮下にあった。

その結果、空母任務部隊3個は集中使用されずに分割され、その一方、遠征軍司令官が空母航空作戦に不向きなだけでなく慎重すぎるのがすぐに明らかになった。フレッチャーの任務部隊はウェーク島への派遣のため移動するよりも、燃料補給に長い時間を費やしていた。さらに、日本軍がウェーク島への上陸作戦を成功させた後も、フレッチャーには依然として輸送船団および巡洋艦と駆逐艦からなる護衛艦隊を襲撃する機会があった。モリソン提督が太平洋戦争の海軍戦史に書いて

⁸ 失敗に終わったウェーク島救援のための遠征部隊に関する短い解説としては、数ある中でも Morison, *The Rising Sun in the Pacific*, pp. 235-254 を参照すべきである。

⁹ Theodore C. Mason, *Battleship Sailor* (Annapolis, MD, 1994)を参照。

いるとおり、18世紀末、ジョン・ジャービス提督は水平線に姿を現したスペイン艦隊を見たとき、「イングランドには今なんとしても勝利がひとつ必要なのだ」と言い、自艦隊にほとんど倍する兵力を擁する敵艦隊を打ち破るため前進していったのである¹⁰。

しかし、機会を捉えることに失敗したのはフレッチャーだけではなかった。ニミッツの現地到着まで太平洋艦隊司令長官の代理を務めていた W・S・パイ中将もフレッチャー以上にリスクを取る意志を持っていないことが実証されていた。そして、結局のところ、戦争における成功はリスクを取ることで勝ち取れるのである。アメリカ史上最も優秀な將軍ユリシーズ・S・グラントとは異なり、「パイは...敵がやるかもしれないこと全てを理解できたが、自分自身が何かをする前に、敵の出方を待ち様子を見たがった」のである。¹¹その結果、パイがフレッチャーに送った指示はまったく不明確で、ウェーク島救援の試みの中でいかなる深刻なリスクも取らない、ためらいと不明瞭さが組み合わされた手紙となっていた。

軍事戦略と開戦後 6 か月

キングとニミッツは、太平洋におけるアメリカの軍事戦略への取り組みの中で、指揮下各部隊が日本軍にどう対処すべきかというビジョンを明確化していった。第一に、アメリカ海軍は日本軍のバランスを崩し、その戦闘能力に損害を与え破壊するため、限定的な主導権を維持しなければならない。第二に、オーストラリアとニュージーランドへの海上交通路を保護しなければならない。第三に、ハワイ諸島、ミッドウェー島、およびジョンストン島からなる三角形を日本に対する戦争の重要な跳躍台として保護しなければならない。そして、第四に、両提督は、合衆国が 1943 年夏に太平洋に到着し始める予定の巨大な海軍力を上手く駆使するために必要な支援を提供する基地および兵站基盤の確立を保証する慎重な取り組みを追求しなければならなかった¹²。フィリピンにアメリカ軍を放置していることについて、ダグラス・マッカーサー大將が声高に不平を述べたにもかかわらず、この重圧下の守備隊の救援は結局実施されず、マレー半島およびオランダ領東インド諸島方面で同様に苦境にある連合軍部隊の救援についても、すでに配置についている小規模なアジア艦隊分遣隊の艦艇数隻以上の試みは予定されていなかった¹³。

¹⁰ Morison, *The Rising Sun in the Pacific*, p. 249.

¹¹ Morison, *The Rising Sun in the Pacific*, p.250.

¹² このときには、毎月だいたい 1 隻のエセックス級空母が、完全充足の航空機と護衛艦艇を伴って太平洋に到着していた。

¹³ この戦域における連合軍の作戦の悲劇的経緯について最良の説明として、H.P. Willmott, *Empires in the*

ただし、判断力と攻撃性に欠ける上級士官の排除もこの三戦略と並行して行われた。真珠湾攻撃がアメリカ人の目をさまさせたのは間違いないが、不幸にもスターク、キンメル、およびショートという例外もあった。そして、ある上級士官が高級戦闘指揮官に必要な性質を備えているかどうかを見極めるはっきりした方法は実際の作戦行動しかなかった。この点で、キングとニミッツは、基準に達しないと分かった指揮官を、前線から遠く離れた、戦争遂行に損害を与えられないような指揮権に遅滞なく確実に押しやる程度にしたたかであった。

この排除作業においては、ニミッツの方が明らかに外交的であった。言い換えれば、ニミッツは個人的な選択においてはそれが重要であるときにのみ冷酷であったのに対して、キングは敬意を覚えない相手に恥をかかせる機会があれば大いに楽しんでやっていたふしがある。真珠湾に着任し指揮権を引き継いだとき、ニミッツは幕僚に対して、自分は首切り役人として来たのではないが実力は評価する、とはっきりと述べた。また、パイ提督を残存戦艦部隊の指揮官として残しさえした。これはリスクの小さい選択であった。これらの旧式弩級艦は鈍足で空母に随伴できないため、遠からず本国西海岸に後退させられる予定だったのである。

ニミッツと麾下部隊はまた、真珠湾攻撃後、大本営が西太平洋、フィリピン諸島、マレー半島、ビルマ、およびオランダ領東インドに注意を集中していた点でも幸運だった。ほとんど日本軍がアメリカの存在を失念してしまったかのようであった。たしかに、日本が開戦に踏み切ったのは、アメリカとその同盟国が日本向けの石油の禁輸を宣言したため石油資源の豊富なオランダ領東インド諸島を奪う必要があると考えたためであった。

日本が東方で兵力増強に努めている極めて危険な敵を見くびっていたという点で驚くべきは、そのインド洋への遠征である。この戦いでは、東南アジアに日本が確保した要地には何の脅威も及ぼさない若干の商船と軽空母1隻の撃沈という成果しか生まれておらず、戦略的影響という点では実質的に何も得られていなかった。インド洋周辺でのイギリスの足場を掘り崩す戦略的可能性はあったが、単なる空母航空隊による空襲ではそれは実現不可能であった。さらに、この空襲によって日本海軍航空隊は貴重な熟練搭乗員を多数失ったが、そうした搭乗員はアメリカに対する戦いでさらに能力を発揮できたはずであった。

真珠湾およびフィリピンのアメリカ軍の戦いぶりから、あまりにも多くの日本の上級将校が、アメリカ人には日本の武士の基準に適用軍を確立する能力がないと考えていた。さらに、帝国海軍の起源が起源なのでイギリス海軍が強力な脅威と思わ

Balance, Japanese and allied Pacific Strategies to April 1942 (Annapolis, MD, 1982)を参照すべきである。

れていたが、これは、特にアメリカが準備していたものと比較すれば、現実的にはほとんど想像上のものであった¹⁴。

こうした戦局から、アメリカ海軍は攻撃的戦略を取ることが可能であったものの、限られた資源の制約の中で実施しなければならなかったが、サモア島への増援の急派は可能だった。1月初旬、「ブル」・ハルゼー少将のエンタープライズ任務部隊は、サモア島に向かう第2海兵師団の大部分を乗船させた輸送船4隻と弾薬運搬船1隻の船団を護衛した¹⁵。それと時を同じくして、日本の水陸両用部隊がラバウルを占領し、ソロモン諸島の延々と続く戦いの舞台が整った。キングとニミッツは、将来の戦争の成り行きにおいてソロモンの島々が占める重要性については、日本の最高司令部よりもはるかによく認識していた。

2月初め、アメリカのマーシャル諸島への最初の攻撃が行われた。ハルゼーはエンタープライズをマーシャル諸島奥深く、ウォッジエ環礁からわずか36カイリ、クェゼリン環礁から155カイリの地点まで進入させ、一方レイモンド・スプルーアンス少将指揮下の重巡洋艦2隻からなる任務部隊はウォッジエ環礁を砲撃した。その間にフレッチャーのヨークタウンがマーシャル諸島南部の3島を攻撃した¹⁶。この攻撃で日本軍に与えた損害は、輸送船1隻および駆潜艇1隻を撃沈し、雑多な船舶多数に損害を与えた程度で、最小限のものだった。

しかし、この攻撃は二重に重要だった。この攻撃によって、アメリカ本国に対して、アメリカは忌み嫌う日本という敵に撃ち返しているということを明確に示したうえに、日本の占領下にある島に対する攻撃に参加した搭乗員にどうしても必要な戦闘経験を積ませたのだ。続く数か月間の空襲の成功度はさらに低かった。2月上旬のラバウル攻撃の試みは、攻撃隊の接近を日本に察知されたことから中止された。2月末には、新たに配置された日本のウェーク島守備隊をハルゼーが攻撃したが、結果は最低限のもので、飛行艇3機を撃破したが、守備隊の死傷者がほとんどいなかったことは間違いない。

南太平洋において最も成功した攻撃はおそらく、ウィルソン・ブラウン少将指揮下の任務部隊が、ニューギニア北東海岸サラマウアへの日本軍の上陸に対処した行動であろう。ブラウンはニミッツに対して、空母1隻の任務部隊では単純に兵力が少なすぎて自衛しつつ敵に大きな打撃を与えるのは困難であると具申ししていた。そこで、ニミッツはブラウンにレキシントンとヨークタウンを与え、日本軍上陸部隊

¹⁴ イギリス海軍に対する日本の態度については、H.P. Willmott, *The Barrier and the Javelin, Japanese and Allied Pacific Strategies, February to June 1942* (Annapolis, MD, 1983), p. 48 を参照。

¹⁵ Morison *The Rising Sun in the Pacific*, p. 259.

¹⁶ 同上、262頁。

を攻撃させたのである。攻撃隊は、オーエン・スタンレー山脈を飛び越えて攻撃し、軽巡洋艦、掃海艇、および輸送船各 1 隻を撃沈し、未帰還はわずか 1 機であった。それでも、こうした空襲では、戦術面でも、作戦面でも、戦略面でも重要な成果は得られなかった。モリソン提督は、日本の最高司令部に与えた衝撃について、ある上級士官の言葉を引用している。「日本人は犬がノミを気にしないのと同様、気にしてはいなかった」¹⁷

しかし、アメリカの戦略の最重要の側面は、ニュージーランドおよびオーストラリアとの海上連絡線の防衛に不可欠であると分かっている島々に、早急に基地を建設し防備兵力を配置することにあった。1 月末、ボラボラ島に燃料補給基地を建設するための人員と装備を積んだ大規模な輸送船団がパナマ運河を通過した。次にそれまでで最大の輸送船団が、クリスマス島、キャントン島、ヌーメア、およびニューカレドニアの守備隊 20,000 名を輸送した。アメリカは、実際のところ、来るべきソロモン諸島の戦いにおいて不可欠であることが証明される基地施設と兵站基盤を構築していたのである。そして、これらはすべて日本軍からは最小限の妨害しか受けておらず、例外として、潜水艦の単独攻撃が若干あっただけだった。

4 月中旬、アメリカ軍は東京に対して有名なドーリットル空襲を行った。B-25 は目標に損害を与えるという点では最低限の軍事的成功しか収めていないが、この空襲は大本営に対する平手打ちのようなものだった。この空襲の事実の推移については読者諸氏もご承知のことであろうから、ここではこれ以上の詳細は割愛するが、この空襲によってもたらされた日本の軍事能力および工業生産能力の損害は微小なものであったとはいえ間接的二次的影響は大きなものであった。まず、陸軍の戦闘機 4 個戦隊が本土防空のため再展開したが、これは 1942 年の残りを通じて本土での継続的防空任務は予定されていなかった部隊である。さらに重要だったのは、大本営海軍部が、アメリカ艦隊の撃滅を狙い、ハワイ諸島への中間点にある重要な防衛拠点であるミッドウェー島を緊急に攻略する計画を練り始めたことだ。

それでもやはり、アメリカはドーリットル空襲によって引き起こされる大きなリスクを決然と取ったのだが、日本のポート・モレスビー攻略作戦阻止に間に合うようにレキシントンとヨークタウンを珊瑚海に配置できたのは、日本の計画が漏れていたからに過ぎない¹⁸。その結果は、日本が戦術的には勝利したが戦略的には敗北

¹⁷ Morison *The Rising Sun in the Pacific*, p. 268.

¹⁸ H. P. Willmott は、他の点では第一級の著作の中で、ドーリットル空襲の戦略的政治的影響を最小限に取扱い、一方でアメリカの取ったリスクを強調している。とは言っても、戦争は最終的には他の何よりも士気と政治的意志にかかっているのだし、アメリカは、日本が水陸両用作戦によってポート・モレスビーを攻略しようとしたときに、阻止に間に合うように珊瑚海に到着できたのである。Willmott の批判については *The Barrier and the Javelin* を参照。

した、決着の付かない戦闘であった。日本軍はレキシントンの撃沈には成功したが、翔鶴が爆弾による損傷を受け、瑞鶴は搭載機の喪失が多く、予定されていたミッドウェー攻略作戦に使用できなくなってしまった。さらに、アメリカ軍はポート・モレスビー攻略阻止のための攻撃を成功させた。

ミッドウェー海戦は日本軍にとって珊瑚海海戦よりもさらに厳しいものとなった。このときまで、戦争における偶然は全て日本に有利に働いていた。しかし、ミッドウェーでは戦いの神々が賽の目を変え、日本にとってうまく行かない可能性のあるものはすべてうまくいかなくなった。ミッドウェー海戦の敗北は、日本にとっては空母4隻の喪失という点で悲劇的なものであったが、さらに重要だったのは貴重な搭乗員を失ったことである。この時以降、日本の航空優勢は低下する一方となる。

しかし、ミッドウェー海戦におけるアメリカの勝利は、アメリカ軍の優位によるというよりも、情報の巧みな利用と機を失せず動いたことによるものだった。明らかに、スプルーアンス提督は日本軍の計画、兵力、および意図について情報部から通報を受けていたという点で強力なカードを手にしており、さらにそのカードを極めて巧妙にさばいたのである。スプルーアンスは病気休暇中のハルゼーに代わって指揮を執っていたのだが、優れた指揮官としての天与の才と精神力を持っていることから、ニミッツとハルゼーに選ばれたのであった¹⁹。スプルーアンスはパイロットではなかったが、戦争と戦闘については、この戦争中のアメリカ海軍の上級指揮官全員の中で最もよく理解していた。スプルーアンスは疑いなく傑出した作戦指揮官であった²⁰。

ミッドウェー海戦の勝利によってもアメリカはそれほど楽になったわけではなかった。日本が依然としてかなりの優位を、特に水上艦艇において保っていたからである。そして、万一日本海軍がその優位性を攻撃的なやり方で利用するようなことがあれば、米豪間の海上連絡線を断ち切ることができたかもしれない。ミッドウェー海戦での壊滅的敗北後には、日本軍がアメリカの戦力が弱体な南方を攻撃してバランスの回復を試みるのではないかと考える向きもあったかもしれない。しかし、日本は、ラバウルでの大規模な海軍基地と航空基地の建設を続けた以外にはその種の行動はとらなかった。

そのため、攻撃とは言ってもあらゆる点で綱渡りのものだったが、それに打って出たのはアメリカの方だった。日本軍はツラギに水上機基地を確保した後、ガダル

¹⁹ スプルーアンスはマーシャル諸島侵攻においてハルゼーの巡洋艦戦隊を指揮していた。

²⁰ 戦争が終わり、あきらかに主要な指揮権のどれにでも任命される状況になったとき、スプルーアンスはニューポートの海軍大学校に戻すよう依頼した。ここで、1任期ではなく2任期を務めたのである。

カナル島に飛行場を建設し始めたが、この飛行場が完成すれば、ソロモン諸島の支配が可能となり、連合軍が太平洋東南部に保有する拠点全てに対して大きな脅威を突きつけることができるようになるはずだった。しかし、ガダルカナル島における日本軍の試みはやる気の感じられないものだった。飛行場建設にあたる設営隊を護衛しているのはごくわずかな第三線級の部隊だったのだ。それは戦術的に恐ろしい過ちであったし、戦略的にはさらにひどい失策だった。

キングは、ガダルカナル島に基地を建設しようとしている日本の試みを頓挫させることを決定していた。使用できる上陸部隊は第1海兵師団しかなかったが、これは最近ニュージーランドに到着していた。指揮官たちは6か月以内の戦闘加入はないと通知されていた。しかし、戦闘加入までには6週間もかからなかった。幸運にも、日本軍はガダルカナル島で本格的な抵抗をするだけの準備をしていなかったのので、1942年8月8日の着上陸は完全に成功し、海兵隊は早くも翌日飛行場を奪取した。さらに、飛行場はほとんど完成していたばかりか、日本軍守備隊が建設機材を使用可能状態のまま放置してジャングルに退却したこともあり、アメリカ工兵隊は1週間少々で仮設滑走路を完成させた。

ほとんど完成した基地として手に入れたこのヘンダーソン飛行場によって、アメリカ軍はこの年の残る期間、ソロモン諸島で発生すると予想されていた数々の戦闘において、昼間の支配権を握ることができた。したがって、この飛行場を占領したことで、アメリカの軍事的能力は最大限に発揮され、日本海軍のそれは非常な制約を受けることになった。

しかし、海上で次に起きたのは悲惨なできごとだった。空母護衛艦隊の司令官であったフレッチャー提督が、3日間ガダルカナル島周辺にとどまることとなっていたのだが、即座に撤退したのである。上陸指揮官のリッチモンド・ケリー・“テリブル(鬼)”・ターナー提督は、この海域に残り、海兵隊が島を保持するのに必要な補給品、武器、および装備の揚陸を続ける、という勇気ある決断を下した。しかし、この正しい決断が、海兵隊向けの補給品と武器を荷下ろししている商船を保護する直衛艦隊の指揮官全般に混乱をもたらした。

その夜、日本の重巡洋艦戦隊が「溝(slot)」(訳注：ラバウル/ガダルカナル間の島に囲まれた海域を指す米将兵の通称)の波を切って襲いかかり、ターナーの直衛艦隊を粉碎して少なくとも4隻の重巡洋艦を撃沈した。第一次ソロモン海戦として知られる戦いである。事実として連合軍にはレーダーピケット艦があったのだが、アメリカとオーストラリアの艦艇にとっては完全な奇襲であった。これは、太平洋戦争の全期間を通じて、アメリカ軍にとっては最も不名誉で避けられたはずの敗北であった。

第一次ソロモン海戦における敗北をさらに悪いものにしていたのは、もしフレッチャーの空母任務部隊が周辺にとどまっていれば、適切な位置にある航空兵力が、退却する日本の巡洋艦戦隊を攻撃して復讐を果たす重要な手段となったであろうということだった。しかし、フレッチャーは生来の用心深さに、すでに指揮下の任務部隊に所属していたレキシントンとヨークタウンを喪失してしまっていたことが重なり、遁走していた。重要なのは、指揮下の艦艇を危険に曝すことを恐れる提督は、戦時にはまったく無用であるということだ。キングはこのときまでにフレッチャーの性格と指揮官としての決意に強い疑いを持つようになっており、3か月後、サンタ・クルーズ諸島海戦の後に解任して退役に追い込んだ。

ここでは、サボ島周辺海域がすぐに「アイアン・ボトム・サウンド（鉄底海峡）」と呼ばれるようになったほど激しかった数々の海戦について詳細に述べる時間はない。しかし、まず触れておかなければならないのは、作戦行動を開始したときのソロモン方面全体の指揮官、南太平洋方面軍司令官（ComSoPac）ロバート・ゴームレー提督がガダルカナル島防衛にあたる海軍部隊と海兵隊に、指導力も真の勇氣も示していなかったということだ。事実、ゴームレー提督はヌーメアのヴィシー・フランスの知事に対して、陸上の司令部施設を提供するよう強制する断固とした意志を持つことさえできなかったのだ。その代わりに、空調設備がなく暑さうだる旗艦上に自らを閉じ込めていたのだ。

そのような悲惨な位置にいても、ゴームレーは事態の進展について直接の展望を得るためにガダルカナルに行くことさえ拒否した。その代わりに、バケツ1杯の悲観的な報告書を提出し、敗北主義に近い報告を行った。10月半ば、ニミッツはうんざりしてゴームレーをハルゼーと交代させた²¹。その結果は即座に現れた。ハルゼーは、着任早々、ヌーメアに適切な司令部を見つけ、フランスの知事を罵倒した。さらに、すぐにガダルカナル島に飛び、現場で状況を評価し、海兵隊員には自分の権限で許される支援はどんなものでも与えると約束した。またヴァンダーグリフトにも、この戦域で得られる支援は全て送ると告げた。数週間うちに、日本軍部隊が北から接近し、サンタ・クルーズ諸島海戦が発生した。指揮下海上部隊に対するハルゼーの命令は、前任者ゴームレー提督のそれとは趣をまったく異にしていた。「攻撃せよ、繰り返し、攻撃せよ」²²。話の残りの部分は、簡単に言えば歴史である。実戦という苛酷な学校で学んだアメリカの各級指揮官たちの力量は、最上のレベルに達していたのである。

²¹ 同時に、ニミッツはバイ提督も解任して追い出し、退役させて海軍大学の校長とした。

²² Potter, *Nimitz*, p. 200.

結論

近年、真珠湾攻撃と1942年11月30日の荒っばい小規模戦闘、ルンガ沖夜戦までの間のできごとが、戦術戦略の両面でアメリカ海軍の学びの場となったと考える見方がある。その学習過程と密接に絡みあっていたのが、戦闘指導力がなく大規模な作戦と戦闘で失敗した上級指揮官を交代させる意欲であった。言い換えれば、アメリカ軍は平時の指導体制という繭から脱皮することができ、基準に達しない指揮官を、最も厳しい状況にあっても目標に向かって力強く手を伸ばす能力を持つと証明済みの指揮官と交代させることができたのだ。何よりも、日本の指導者たちの失敗にも大きく助けられ、アメリカはその戦略的アプローチを最大限に利用して、問題となっていることに集中を続けて、日本の航空部隊と海軍部隊の兵力を消耗戦で大きく弱らせることができた。

このプロセスはアメリカの参戦にあたり、スタークとキンメルの名を、それぞれキングとニミッツに交代させたことで始まった。この2人の提督は、次に、指揮下の提督たちの能力を測るために、その無慈悲な手を伸ばした。その結果、戦争の後半2年間アメリカ海軍に幾多の大勝利をもたらした「ハルゼー/スプルーアンス」型指揮官が、ゴームレー、フレッチャー、その他多数の指揮官に取って代わったのである。不適格な上級指揮官の除去と注意深くしかし攻撃的な戦略的アプローチが相まって、アメリカ軍は、まず珊瑚海とミッドウェーという二つの大規模戦闘に勝利し、ソロモン諸島方面の空中および海上で発生した小部隊による厳しい戦闘で日本の海軍力を消耗戦で弱らせることができた。

両軍とも1942年11月までに、戦前建造の航空母艦および熟練搭乗員のほとんどを失っていたが、アメリカだけは、その造船所、航空機工場、および訓練施設から大量に生み出される補充が戦闘に参加することを楽しみに待つことができた。また、アメリカ軍は多くの面で幸運だった。ミッドウェー海戦の勝利は神からの贈り物以外の何ものでもなかった。ソロモン諸島における苦い敗北の数々は、1942年10月まで続いていたとはいえ、1943年に開始された大規模な反攻作戦に不可欠と分かった重要な作戦根拠地がそれによって脅かされたわけではなかった。さらに、そうした敗北は、戦争全体を通して好ましい結末を迎えるようにしようというアメリカ国民の意志を強めたただけであった。

もしも大本営が大きなリスクを取っていたなら、南太平洋に展開可能な限られたアメリカ海軍部隊を撃破することになっていたかもしれない。さらに、ガダルカナル島の第1海兵師団が撃滅され、アメリカの士気を大きく傷つけることになっていたかもしれない。しかし、そうはならなかった。平時型指導部と、直面する脅威を

軽く見てしまう破滅的な「勝利病」の組合せのためである。大和と武蔵がトラック環礁の泊地に投錨している間に、主導権は確実に彼らの手から滑り落ちていったのだ。

アメリカ人とは対照的に、真珠湾攻撃とミッドウェー海戦におけるとてつもない失策を犯した南雲提督が、それにもかかわらず、1942年8月の第二次ソロモン海戦だけではなく10月下旬のサンタ・クルーズ諸島海戦でも日本海軍空母任務部隊の指揮を執っていたことは注目に値する。南雲提督はこのどちらの戦闘でも名を上げることはできなかったのだが、それでも1944年には非常に重要なサイパン島守備隊の指揮を執っていたのである。キングとニミッツはそのような無能ぶりを我慢はしなかっただろう。

日本は準備がまったく整っておらず指揮統制もなっていない敵軍と戦って驚くべき勝利を収めたという点で不運であった。

そのせいで、平時意識のままにいる指揮官を交代させることがなかったのである。